

エコツーリズムによる震災復興支援の実証的研究—岩手県宮古市における研究—

1000年の絆を紡ぐ宝探し調査中間報告

Empirical studies of earthquake reconstruction assistance through eco-tourism in Miyako city, Iwate

From over thousand years treasure hunting to Ecotourism

研究代表 海津ゆりえ*

KAIZU Yurie

1. はじめに

(1) 調査主旨

東日本大震災は、三陸地方沿岸一帯に2万人を超える死者・行方不明者と4県にわたって三陸地域は、貞観時代より幾度も大地震と大津波に遭遇してきた所謂「津波常習地」である。しかし住民はこの地を捨てることなく、たびたび地震に見舞われることをも地域の特性として、子孫に伝えるべき知恵の一つに数えて住み続けてきた。住み続けるとは、地域の誇り（「宝」）を連続と継承してきたということである。これらの地域が今日に至っている背景には、地域の誇りが精神的な支えとなり、復興へ向かう人々にエネルギー源を供給してきたからであろう。これから長期間に及ぶことが予想されている復興においても、住民が先祖から伝えられてきた地域の宝を再確認し、活力や文化を感じ取ることによってコミュニティを再びつないでいくことが重要となる。

今ある資源を生かした観光は、宝を伝え、かつ経済をも得る方法として有望であるが、被災地での人的・物的被害も、救災や復旧状況も不均衡に進んでいる現状から、環境整備を求める従前の観光スタイルの復興は今すぐ望めるものではない。

そこで本研究は、地域の宝が、被災から復興へと、地域の人々が再び活力を取り戻すにあたって、重要な絆として精神的な支えとなるとの認識にもとづき、被災地域住民へのヒアリング調査により、震災のなかで生き残った自然・生活文化・生業・技術等の「宝」の掘り起こしを行い、それらを活かして住民が参加できるエコツアーの実施により、被災地域の宝を核とした地域復興プランを住民とともに検討・作成することを主旨とした。

対象地には調査者ら（海津・真板）が20年間に亘り「宝探し」を支援してきた岩手県二戸市を仲立ちとして岩手県宮古市を選定した。同市はスーパー堤防で知られる田

老地区が震災後知られるようになったが、浄土ヶ浜を有する観光地であり、本州随一の鮭の生産量を誇る漁業地域でもあった。同市の宝として廻り神楽として国指定文化財に指定されている黒森神楽を有している。本調査では、黒森神楽や生業、食等に注目して行うこととした。

(2) 調査目的

岩手県宮古市を対象地として以下の3点を目的とした。

- ①対象地における震災前の観光資源の賦存状況の把握とデータベース化
- ②住民へのヒアリング調査による自然・生活文化・生業・知恵等の宝の把握とフェノロジーカレンダーの作成
- ③調査結果をもとにした「宝を活かした地域復興プラン」の提案

(3) 調査実施概要及び計画

7月14日：宮古市長との打ち合わせ、宿泊所下見

8月11日：事前研修（於 日本エコツーリズム協会）

8月22～27日：第1回現地調査

2012年1月3～5日：第2回現地調査（神楽見学）

2012年3月：最終報告「宝を活かした地域復興プランについて」（現地にて）

(4) 研究手法

既存観光資源の賦存状況および地域の概況把握は文献調査および地図解析により行い、宝の把握は自治体との交渉により対象地区を選定し、ヒアリング調査により行うこととした。

(5) 調査体制

1) 研究メンバー

海津ゆりえ（研究代表者）

真板昭夫（研究分担者・京都嵯峨芸術大学）

橋本俊哉（研究分担者・立教大学）

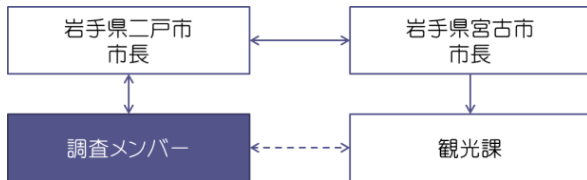
堀木美告（研究分担者・財団法人日本交通公社）

比田井和子（研究協力者・未来政策研究所）

緒川弘孝（研究協力者・コンサルタント）
 五日市知之（研究協力者・二戸市職員）
 川上陽介（研究協力者・二戸市職員）

2) 現地協力体制

岩手県二戸市長と宮古市長の連携のもと、調査メンバーの受入窓口として宮古市観光課に担当いただくこととなり、ヒアリング対象者の選定等を依頼した。



図表1 研究体制

2. 調査結果

(1) 観光資源の被災状況

財団法人日本交通公社調査により、観光資源の被災状況が明らかとなった。それによると浄土ヶ浜や奥浄土ヶ浜等の自然景観（奇岩群）は大きな破損等は見られなかったが、それらの観光資源に付帯する施設や家屋等の構造物は著しい被害を受けた。特に浄土ヶ浜の新築のレストハウスは1階部分が冠水して壊滅的な被害を受け営業不能となった。遊歩道の一部やトイレ等も津波で破壊され、観光船も2隻のうち1隻が流された。

一方、鮭の養殖場や漁港の製氷工場等が破壊され、鮭の放流や漁の水揚げ等の再開に時間を要する状況である。

(2) ヒアリング調査

第一次調査（8月22日～27日）および10月24日にかけて、のべ24名の対象者にヒアリングを行った。現地調査は文教大学・立教大学の学生9名及び五日市知之、川上陽介（以上二戸市）、比田井和子、により行った。ヒアリングテーマおよび対象者は図表2の通りである。

1) 黒森神楽について

黒森神楽は宮古市山口にある黒森神社でご神体に神を移し、1月3日から3月にかけて三陸沿岸一帯を巡行する。宮古市、旧田老町、岩泉町、野田村、普代村、田野畑村を回る北回り巡行ルートと、宮古市、旧新里村、山田町、大槌町を回る南回り巡行ルートがあり、1年おきにどちらかのルートをたどる。

黒森神楽の巡行は18世紀から記録が残されている。元来は集落の家々にて門付して神楽を舞ったが、近年は公民館等の公演が増え、夜神楽は見られなくなったが、山

図表2 ヒアリングテーマと対象者（8月22～27日）

テーマ	人数	対象者属性
市全般	2名	副市長、企画課
市の観光	2名	観光課、観光協会*(10/24)
神楽	8名	神社氏子総代、神楽保存会、教育委員会、神楽衆
漁業	1名	水産科学館
農業	1名	農業者
食	2名	生活改善グループ、南部鮭加工研究会
自然	7名	環境省、教育委員会
まちづくり	2名	NPO法人（田老地区）

間部では今も屋敷に神楽衆を迎え入れる家庭が残されている。年1回、浜と山を結び人が訪れてくれる神楽は、住民にとって心待ちにする存在であり、飢饉等災害があるとその翌年の神楽は盛大に舞うことが慣習的に続いている。

2) 宮古市のフェノロジーについて

生業、食等に関する季節情報をもとに、フェノロジーの作成を進めている。今後、現地での再確認を経て暦づくりを行う予定である。

3) 震災を語り継ぐ知恵について

田老地区や浄土ヶ浜地区等、沿岸や脇街道沿いのいたるところに震災の碑や教訓が残されている。神社や寺は被災を免れたところが多いことから、震災を語り継ぐ知恵の継承の存在が示唆されている。

本調査においてはこれらの碑や教訓の所在についても把握に努める予定である。

3. 今後の計画

2012年1月3日から開始される神楽興行に合わせて、第2回現地調査を実施する。結果を取りまとめ、エコリズムを活用した震災復興プロジェクトに関して討論を行う予定である。

【参考文献】

- ・真板昭夫・高梨洋一郎・比田井和子編著（2010）：宝探しから持続可能な地域社会づくりへ、学芸出版社
- ・宮古市教育委員会（1991）：「宮古市史」、宮古市
- ・宮古市教育委員会（1999）：「陸中沿岸地方の廻り神楽」報告書、宮古市
- ・神田より子（1992）：「役舞の世界—陸中沿岸地方の神楽より」